



# 『吉備の王墓・造山古墳 大吉備諸進命、千足古墳埋葬者 三井根子命説』

## 目次

1	はじめに	3
2	古墳時代の吉備と阿蘇の交流記録 葦分国造 三井根子命 (吉備津彦命の御子)	
3	造山古墳の舟形石棺	4
4	瀬戸内市の築山古墳 (瀬戸内市長船町) ・阿蘇ピンク石	
5	赤磐市の小山古墳 (阿蘇石) と朱千駄古墳 (播磨・竜山石)	5
5.1	なぜ石棺を使用するのか	6
5.2	日本の石棺・竜山石	7
5.3	阿蘇溶結凝灰岩 (馬門石・熊本県宇土市)	
5.4	古墳時代の阿蘇石棺の運搬方法	
5.5	阿蘇石棺の運搬経路	
5.6	大王のひつぎ航海実験結果	8
6	千足古墳 (陪塚五号墳) と直弧文が発見された古墳所在地	
6.1	千足古墳埋葬者の推定	9
6.2	吉備国の国造調査	
6.2.1	神武天皇 (神日本磐余彦命天皇) 妃興世姫命	10
6.3	『先代旧事本紀』と『先代旧事本紀大成経』	
6.3.1	『先代旧事本紀大成教七十二卷本』の黄蕨	
7	榊山古墳 (陪塚一号墳) 出土の馬形帯鉤提砥	
8	『古事記』の第七代孝霊天皇と大吉備諸進命	12
8.1	第七代孝霊天皇と欠史八代説	
8.2	末子相続から古代天皇の渡来元の推定	
9	吉備王の弟・鴨別へのこだわり	13
9.1	吉備鴨別と熊襲国征討	
10	四道将軍・吉備津彦と「備中吉備津宮勸進帳」	14
10.1	「備中吉備津宮勸進帳」と名前の交換	
11	まとめ	
11.1	造山古墳埋葬者と千足古墳埋葬者の推定	15
11.2	吉備津彦命と吉備津彦『日本書紀』	
11.3	造山古墳石棺に、何故、阿蘇石を使用するのか	16
12	追記『焚火による縄文ベンガラ製造実験に成功』	
13	謝辞	18
14	主なる参考文献	19

令和5年度 岡山市立東山公民館主催事業 東山ふれあい大学  
『吉備の王墓・造山古墳 大吉備諸進命、千足古墳埋葬者 三井根子命説』

黄蕨の会 苺田万澄 丸谷憲二

1 はじめに



図1 つくりやまこふんばいちょう 造山古墳陪塚

造山古墳を訪問し定廣好和氏（造山古墳蘇生会会長）から、著書『吉備のまほろば 造山古墳陪塚』をいただき、前方部から出土した石棺が熊本県阿蘇山の溶結凝灰岩と知り、吉備国と阿蘇国との関係を調査しました。

古代阿蘇国は二つに別れており、葦分の国造が吉備津彦命の御子でした。結論として、吉備国の祖父が亡くなり石棺をプレゼントしました。祖父の名前は『古事記』から「兄の」が削除されていました。

造山古墳の埋葬者を大吉備諸進命と推定しました。同時に千足古墳の埋葬者は『吉備津彦命の御子三井根子命』となります。

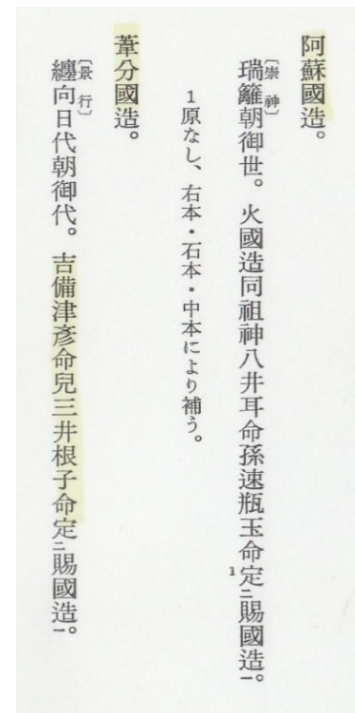


図2 『先代旧事本紀』

物部氏の『先代旧事本紀』巻第十 国造本記に注目しました。吉備津彦命の皇子にとって、最も大切な吉備国人は「吉備津彦命のお父様、大吉備諸進命」です。それが阿蘇石の石棺・重量約2t、石棺の蓋約1t、合計3tを、宇土市から遠く離れた吉備国に「ひつぎ」として運ぶ理由であり、宮内庁が管理する陵墓は、1都2府30県にわたり、陵188の他、箇所数として460箇所もありますが、造山古墳が陵墓に含まれない理由です。

2 古墳時代の吉備国と阿蘇国の交流記録

葦分国造 三井根子命（吉備津彦命の御子）

『先代旧事本紀』巻第十 国造本記の、「葦分の国造 纏向日代朝の御代に、吉備津彦の命の御子三井根子の命を国造に定められた。」（葦分国は熊本県南部宇城市・水俣市・八代市付近）に注目しました。

景行天皇の宮です。「日本書紀」景行天皇一一年一一月の条に「則ち更纏向に都つくる。是を日代宮と謂す」とあり、吉備津彦命の御子で吉備国と直結しました。

九州には吉備国と関係の深い国造が多いことに注目しました。『先代旧事本記』巻七に、「豊国別皇子 吉備別の祖とあり、巻十では日向の国造の祖とされ、国前の国造志賀高穴穗朝（成務天皇の御代に、吉備臣と同じ先祖（大吉備津日子の命、若日子建吉備津日子の命）の六世の孫、午佐自の命を国造に定められた。（国前国は大分県国東半島付近）に注目しました。

『日本書紀』では稚足彦天皇。初めて行政区画を定め、4世紀中ごろに在位した大王です。武内宿禰を大臣に任命し、吉備国と深くかかわっています。吉備地方と関連する出土品が見られ、神武朝に神皇産霊命の五世孫の天道根命を国造に定めたが国造の初見です。

### 3 造山古墳の舟形石棺

造山古墳（岡山市北区新庄下）は、5世紀前半（紀元400年代前半）の築造。国指定史跡（造山古墳第1・2・3・4・5・6古墳）、大正10年（1921年）3月3日指定。日本遺産平成30年（2018年）認定。舟形石棺蓋の内面の朱色は阿蘇黄土（リモナイト）を焼いたベンガラと推定しました。小口側の面には直弧紋のような線刻が残り、刳抜式石棺です。

材質は熊本県阿蘇山の溶結凝灰岩（馬門石）で石棺は灰黒色です。田中徹氏（ガイド）は柔らかい石であり、鉄がなくともサヌカイトで刳抜加工できると説明されました。地元には、北側にあった新庄車塚古墳址からの移転説もあります。七つぐろの中に吉備一族以外の古墳があれば、朱千駄古墳と同じ播磨の竜山石の石棺が発見されます。



図3 舟形石棺と蓋のベンガラ

### 4 瀬戸内市の築山古墳（瀬戸内市長船町西須恵）・阿蘇ピンク石

岡山県指定史跡  
築山古墳  
昭和三十四年三月二十七日指定

この古墳は、北に伸びた低い丘陵の端部を加工して造られた全長八二メートルの前方後円墳です。前方部は東向きで幅六六メートル、高さ約一〇メートル、後円部は三三メートル、高さ九メートルを測ります。墳丘は二段築造で、各段の縁と墳丘の裾に円筒埴輪が巡っていたことが知られています。一九〇七年、後円部中央の割り石小口積みの石室が掘られ、現在その上部は失われ家形石棺が露出しています。石棺は凝灰岩製で、これまで奈良県と大阪府の境の二上山産と推測されてきましたが、最近の検討により熊本県の阿蘇山産と考えられています。遺物として鏡のほか玉類、武器、馬具などが出土しており、現在東京国立博物館に収蔵されています。これらの遺物により、この古墳は五世紀後半から六世紀前半頃の築造と考えられています。

瀬戸内市教育委員会



図4 築山古墳家形石棺

5 世紀後半の瀬戸内市を代表する前方後円墳で阿蘇ピンク石の家形石棺です。平成 2 年 (1990 年) に高木恭二氏 (宇土市教育委員会) と渡辺一徳氏 (阿蘇火山研究・熊本大学教授) が築山古墳の石棺を分析し、阿蘇山溶結凝灰岩 (馬門石) と突き止めました。現在確認されている阿蘇溶結凝灰岩製石棺は 15 基です。高木恭二氏は「石棺色は灰黒色使用からピンク色使用に変化」と教示されます。

## 5 赤磐市の小山古墳 (阿蘇石) と朱千駄古墳 (播磨・竜山石)

赤磐市穂崎には、小山古墳 (阿蘇石) と朱千駄古墳 (播磨・竜山石) があり、直線距離で 500m 程度ですが、石棺の産地と石棺の製造方法が異なります。この違いに関心を持った研究者はいないようです。



図 5 小山古墳と舟形石棺の破片

小山古墳は、古墳時代中期 (5 世紀末～6 世紀初頭) の前方後円墳です。造山古墳の舟形石棺と同じ「熊本県阿蘇山の溶結凝灰岩で、刳抜式舟形石棺の破片が放置されています。平成 19 年 (2007 年) に赤磐市の考古資料に指定され、破片に縄掛突起も残る貴重な石棺です。熊本県宇土半島から産出する石材が赤磐市でも発見されています。小山古墳発掘時の円筒埴輪が造山古墳陪塚 2 号墳の円筒埴輪等が 108 本発見との類似を感じます。



図 6 小山古墳の説明と発掘時の円筒埴輪

朱千駄古墳の名前の朱に注目しました。古代の赤色は魔除け、再生、祈りの顔料でした。

組合せ式長持形石棺内の多量の赤色顔料はベンガラです。同時に隣に展示してある八幡大塚2号墳(岡山市北浦)の組合せ式長持形石棺の赤色顔料ベンガラに注目しました。古墳のある地元の赤泥で製造と推定し、令和4年10月31日に「焚火による縄文ベンガラ製造実験」を行い、縄文ベンガラ製造実験は大成功でした。(12 追記『焚火による縄文ベンガラ製造実験に成功』参照) 岡山県立博物館前に展示。

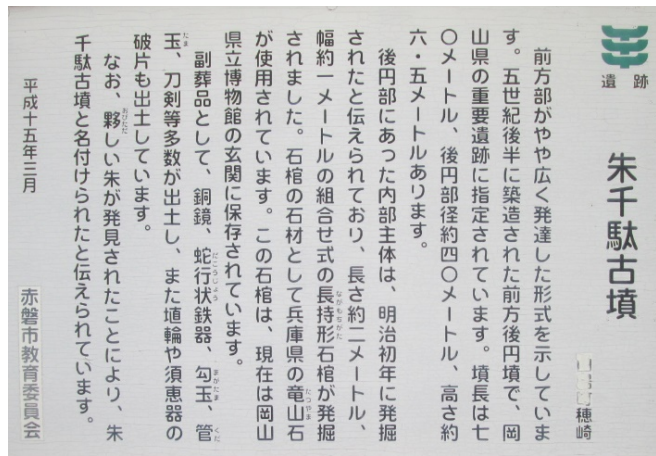


図7 朱千駄古墳の説明と竜山石の石棺

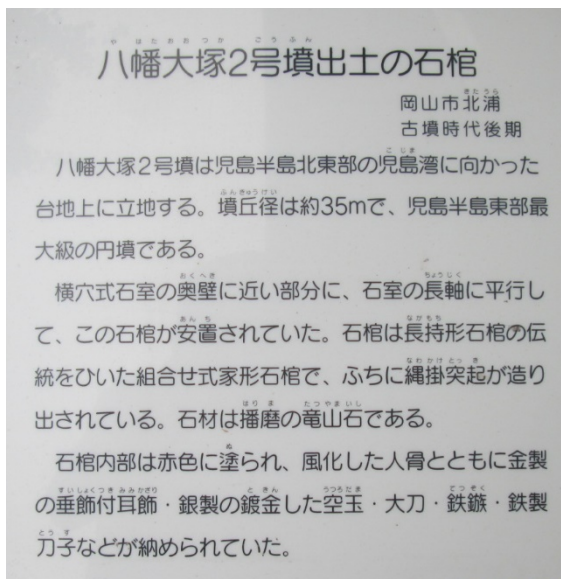


図8 八幡大塚2号墳の組合せ式家形石棺

## 5.1 なぜ石棺を使用するのか

棺桶には石棺、陶棺、木棺が使用され、日本では古墳時代に石棺が使用されました。エジプトやローマでは、初期王朝時代の王家の墓に石棺が使用されました。石棺を使用する目的は、死体を保護し、劣化から保護するためです。死体を防腐処理し、リネン（亜麻繊維を原料とする糸・織物。強く、水分の吸収発散が早い）で包み、来世のために死体を準備するのがミイラ化のプロセスです。死体をミイラのケースに注意深く入れ、石棺の中に置きます。石棺は重く、動物や盗掘者から死体を保護してくれます。石棺への装飾は重要な宗教的役割を果たしています。

## 5.2 日本の石棺・竜山石

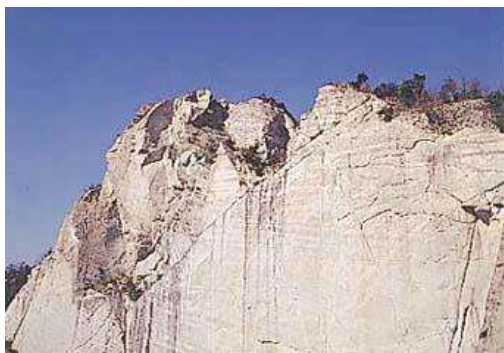


図9 竜山石

古墳時代の初め頃を除き古墳時代の全期間に石棺が使用され、播磨地方は、石棺石材の一大産地・竜山石（流紋岩質凝灰岩）の産地で全国有数の石棺集中地域です。石棺は形状により、①割竹形・舟形石棺（前期）、②長持形石棺（中期）、③家形石棺（後期）と変化し、構造から組合式石棺と刳抜式石棺に分類されます。竜山石は古墳時代中期以降の大型古墳で使用され、「大王の棺」説があります。

## 5.3 阿蘇溶結凝灰岩（馬門石・熊本県宇土市）

造山古墳の石棺には、熊本県宇土市で産出する阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）が使用され、阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）の分布の中心が大和であり九州には皆無とされ、阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）家形石棺が畿内中心部の勢力のための石棺として、阿蘇の石材が用いられたと説明されてきました。野神古墳、別所鐘子塚古墳。兜塚古墳、金谷の石棺、東乗鞍古墳、平成10年に高木恭二氏が発見した継体大王の陵墓とされる今城塚古墳（大阪市高槻市）石棺です。531年に没した第26代継体大王の陵墓と考えられ、古墳時代の大王陵としては唯一、淀川流域に築かれた古墳です。継体天皇は応神天皇五世の子孫（来孫）です。

「大王の棺」として数トンの重量物を運搬する様子を見せるのが阿蘇石棺です。見せる石棺は現代の国葬儀に通じます。

## 5.4 古墳時代の阿蘇石棺の運搬方法

古代の巨石運搬については、中根洋治氏ほかの「運ばれた巨石に関する一考察」（土木学会第63回年次学術講演会、2008年発表）があります。テコによる巨石持上げと修羅（修羅はソリが変化し発達したものであり、自然の股木を利用したY字形のソリ）の利用、海上の長距離運搬は浮力を利用



（天地逆）して水中を二艘の舟で吊って運びました。図10 浮力を利用（天地逆に運搬か）  
見せる大王の棺としての浮力の利用です。平成10年に今城塚古墳（大阪府高槻市）で発見された石棺を復元しました。

## 5.5 阿蘇石棺の運搬経路

阿蘇山石棺の運搬経路について高木恭二氏は「石棺・石障輸送経路想定図」を作成し、『阿蘇凝灰岩製石棺の分布図』で「阿蘇凝灰岩は大和王朝のひとつ前の王朝の象徴」説を発表していますが阿蘇石の研究者としての思い入れです。

## 5.6 大王のひつぎ航海実験結果



図 11 「石棺・石障輸送経路想定図」高木恭二氏作成

平成 17 年 (2005 年) 7 月 24 日に宇土市からの搬送航海開始、航路は有明海から玄界灘、関門海峡を經由して瀬戸内海を進み、玉島港着は 8 月 20 日、大阪南港到着は 8 月 26 日で、総航行距離は 1006 km です。寄港地は 22 か所、荒天への予備日を除く実質的な航海日は 23 日でした。古代では 50 日は掛かると推定されました。

実験航海終了後の 8 月 28 日に、高槻市で修羅曳きイベント「1000 人で運ぶ大王の石棺」が行われました。輸送実験終了後に石棺の仕上げが行われ、最終的に復元された石棺は、蓋は全長 240 cm、幅 124 cm、高 65 cm、重量 2.9t。身は全長 240 cm、幅 125 cm、高さ 89 cm、重量 3.8t でした。使用された修羅は近つ飛鳥博物館で保存展示されています。

## 6 千足古墳 (陪塚五号墳) と直弧文が発見された古墳所在地

陪塚 5 号墳の帆立貝形古墳が千足古墳です。造山古墳の陪塚として 1921 年 (大正 10 年) 年国史跡に指定。遺体が納められた千足古墳の石室は、四壁に沿って直弧文の彫刻がある石障と呼ばれる板石を立て並べた構造で、肥後 (熊本県) に分布が集中する特異なものです。古墳の埋葬施設の直弧文は 10 例発見され、主たる分布は熊本県宇土半島に 5 例、福岡県の筑後平野西部に 3 例、岡山県に 2 例です。宇土市のヤンボシ塚古墳は千足古墳の石室とそっくりな石室で両古墳石室の構築に同一工人集団が関わったと推定されています。この石障は吉備から約 500km も離れた天草から宇土半島に産する千足だけが天草砂岩であり、他は阿蘇溶結凝灰岩です。天草砂岩の板状石は荒彫りされたのち、中仕上げの状態で古墳の一面に大事に置かれ、被葬者が無くなった直後に直弧文は刻み始められたのであろうと推定されます。石障に刻み込まれた直弧文と呼ばれる幾何学文様は、肥後の豪族が好んで用いた装飾文様です。埋葬された人物は、吉備氏を支えた有力者で、宇土の出身者か、宇土と何らかの関係があった古代人となります。(高木恭二説)





図 12 千足古墳と円筒埴輪

### 6.1 千足古墳埋葬者の推定

『先代旧事本記』卷第十 国造本記の、「葦分の国造 纏向日代朝の御代に、吉備津彦の命の御子、三井根子の命を国造に定められた。」(葦分国は熊本県南部宇城市・水俣市・八代市付近) に注目し、千足古墳の埋葬者を三井根子の命と推定しました。吉備津彦命の御子です。葦分国(宇土半島)と吉備地方との密接な関係として高木恭二氏は、「千足古墳の主墳である造山古墳の前方部に所在する舟形石棺」と、「熊本県宇土市の鴨籠古墳石棺と造山古墳石棺との類似」を指摘されます。造山古墳完成後に鴨籠古墳石棺製造説があり、産地は宇土市網津町馬門です。

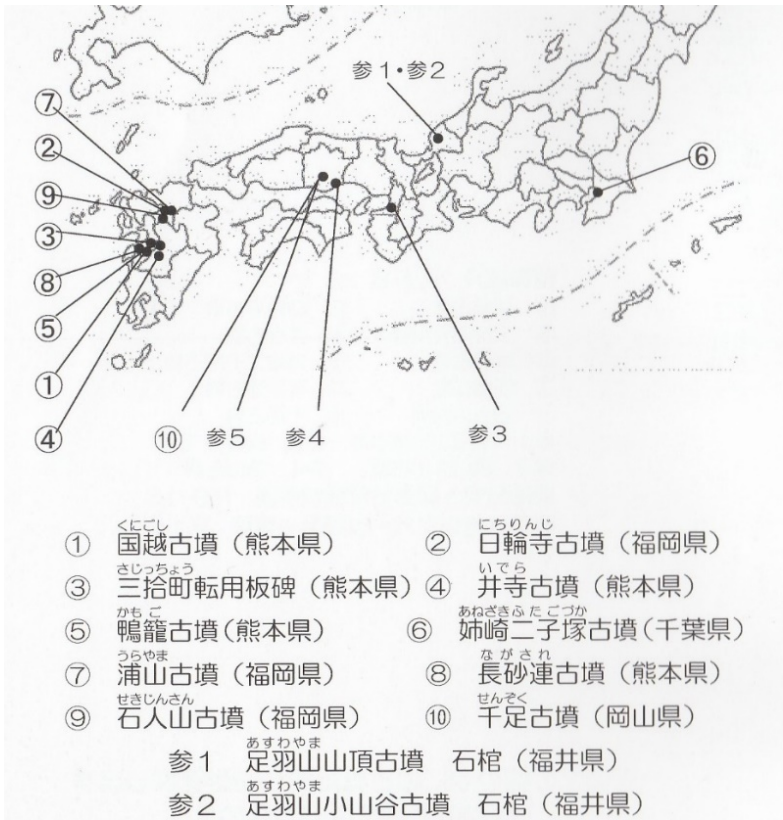


図 13 直弧文が発見された古墳所在地 西平孝史氏作成

### 6.2 吉備国の国造調査

吉田晶氏(岡山大学教授)の『吉備地方における国造制の成立』の発表は1972年の『史学研究』です。出宮徳尚氏(岡山市教育委員会)が1993年の『吉備津彦伝承考』、1994年の『吉備津彦と造山古墳』「吉備津彦の系譜」と「造山古墳の被葬者への展望」を発表されました。しかし、国造調査が吉備国内のみの限定調査です。九州の国造調査が実施されていません。系譜調査「天皇系譜と吉備関連人物」も記録を正しいとして現在の家族制度で考察されています。古代の平和的国土拡張策が移動地での、現地の女性との間に子供を造ることです。神武天皇は在地豪族の娘を妃と

することで、在地豪族を懐柔していきました。高嶋8年滞在説の調査結果です。名前から

の時代検証は不可能です。

高穴穗宮御世、黄蕨臣等同祖黄蕨津彦六世牛决道命、定賜國造、  
 伍通國造  
 日代宮朝御代、黄蕨津彦命兒三井根子命任、定賜國造、天皇征西時、黄蕨津彦命白雲上、乘白馬、下向告兒、教  
 云、天皇征西、汝相軍氣、勝負如斯、自口吐氣、氣形種多、吉凶勝負、豫知分明、依以聞天皇時、天皇大悅、  
 果如其所教、圖之爲家珍、

図14先代旧事本紀大成経

### 6.2.1 神武天皇（神日本磐余彦命天皇）妃の興世姫命

神島神社(笠岡市神島外浦)は、延喜式神名帳に備中小田郡神島神社とあり式内社です。創建は奈良時代神亀3年(726)、祭神は神武天皇(神日本磐余彦命天皇)と興世姫命です。

「神武天皇は日向より東征の砌、吉備高島に8年間駐屯された。その後、海上より熊野に至り大和平定後、橿原の地に第1代踐祚の大偉業を成された。妃興世姫命は、部下を率いて当地に駐留され天業を扶翼してこの地に崩御された。近郷住民は命たちの高き尊き御神徳を畏みて一大崇敬産土神と齋き祀った。」と。「岡山県神社庁より」

神武天皇の皇后は、『日本書紀』で「媛蹈鞰五十鈴媛命。『古事記』では「比売多多良伊須気余理比売」、別名「富登多多良伊須岐比売」。神武天皇は東征以前の日向で吾平津媛を娶り子供も二人いました。『古事記』では阿比良比売。神武天皇の日向在住時に嫁し、手研耳命と岐須美美命を生みました。興世姫命の記録は神島神社のみです。つまり、笠岡の在地豪族の娘です。在地豪族の娘を妃とすることで、在地豪族を懐柔していきました。「吉備國の行館の高嶋宮は、笠岡市高島の王泊にあった神島宮です。」

### 6.3 『先代旧事本紀』と『先代旧事本紀大成経』

吉田晶氏と出宮徳尚氏の国造調査は『先代旧事本紀』によるものです。岡山県では江戸時代から『先代旧事本紀大成経』が使用されてきました。推古30年(622年)成立の『先代旧事本紀大成経』の国造本紀には、『先代旧事本紀』の前の国名が書かれています。葦分国造の前は伍通国造でした。

#### 6.3.1 『先代旧事本紀大成経七十二卷本』の黄蕨

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』は、岡山県立図書館と岡山大学図書館蔵書です。『続神道大系』の4冊に分冊され、黄蕨国は『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』小笠原春夫校注 平成11年 神道体系編纂会収録です。

黄蕨、黄蕨津彦命に注目ください。黄蕨国の初見は、推古30年(622年)成立の『先代旧事本紀大成経』です。推古30年(622年)成立ですから『古事記』、『日本書紀』より古い記録です。

岡山大学池田家文書の、正徳3年(1713年)『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』の「黄蕨之前州」に注目しました。黄蕨前州とは備前です。『黄蕨』は吉備の最古の表記です。宝暦2年(1753年)の『黄蕨雑録』(岡山県立図書館蔵)にも収録され、享保6年(1721年)の『備陽記』に読み下しされています。「吉備と云国名は当島の蕨よりはしまれり、今に至りて大なる蕨の生けるは此ゆへなるべし」と。

『先代旧事本紀大成経』国造本紀です。『先代旧事本紀』の前の国名が書かれています。阿蘇国の前は火前国造と火後国造でした。吉備国も細かく分かれていました。

先代舊事本紀大成經(武田本)

山陽道十國	山陽國造	針閉國造	黄蕨縣國造	黄蕨穴國造	黄蕨國造	三野國造	見坂國造	下道國造	茅谷國造	大野國造
上道國造	二閑國造	見坂國造	下道國造	茅谷國造	大野國造	三野國造	見坂國造	下道國造	茅谷國造	大野國造
山陽道十國	山陽國造	針閉國造	黄蕨縣國造	黄蕨穴國造	黄蕨國造	三野國造	見坂國造	下道國造	茅谷國造	大野國造
明石國造	秋飽國造	葉莖國造	窠匄國造	縑脫國造	縑脫國造	六門國造	城敷國造	淡道國造	栗葉國造	狹長國造
熊野國造	猪世國造	州見國造	小市國造	風速國造	風速國造	熊野國造	猪世國造	州見國造	小市國造	風速國造
狹貫國造	豐前國造	寬狹國造	豐後國造	伍通國造	伍通國造	狹貫國造	豐前國造	寬狹國造	豐後國造	伍通國造
遠狹國造	築石前國造	築石後國造	松浦國造	松津國造	松津國造	遠狹國造	築石前國造	築石後國造	松浦國造	松津國造
旻方國造	火前國造	火後國造	天草國造	吾斐國造	吾斐國造	旻方國造	火前國造	火後國造	天草國造	吾斐國造
日向國造	大隅國造	編締國造	穀種國造	狹紘國造	狹紘國造	日向國造	大隅國造	編締國造	穀種國造	狹紘國造
葛立國造	二瓶國造	多嶋國造	如城國造	津嶋國造	津嶋國造	葛立國造	二瓶國造	多嶋國造	如城國造	津嶋國造
平戸國造	如城國造	津嶋國造	如城國造	津嶋國造	津嶋國造	平戸國造	如城國造	津嶋國造	如城國造	津嶋國造

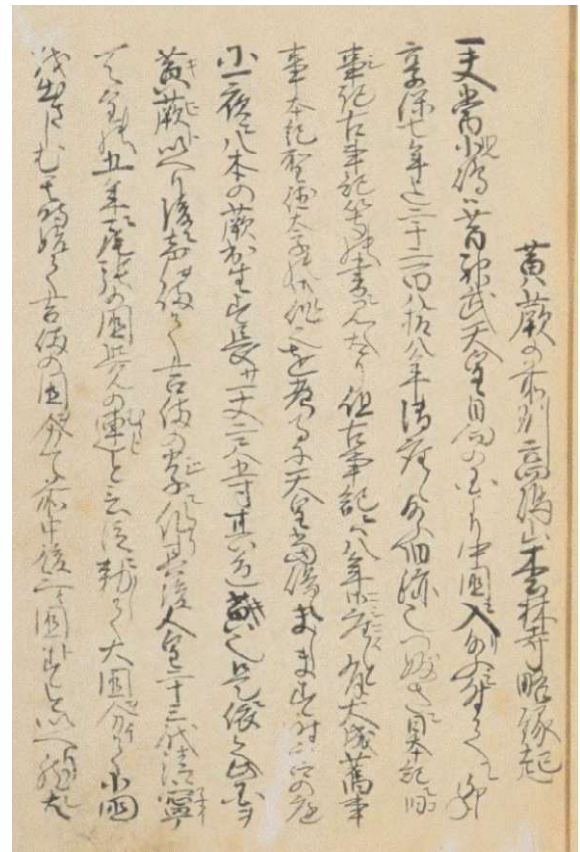


図15 『先代旧事本紀大成経』 国造本紀

図16 『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』

### 7 榊山古墳 (陪塚一号墳) 出土の馬形帶鉤提砥



図17 榊原古墳出土馬形帶鉤提砥 岐阜県洞北山5号古墳出土です。

榊山古墳出土の馬形帶鉤(宮内庁書陵部所蔵)に注目しました。帶鉤とは革帯につける帶留め金具で6個ほど出土しています。中国の春秋戦国時代から漢代にひろく用いられました。5世紀前半構築で木棺と同時出土

この馬形帯鉤を日本への馬の渡来記念品と考えます。榊山古墳の埋葬者は騎馬民族です。砥石に孔をあけて腰から下げる提砥が出土しています。個人所有の刀子などの小型鉄器が普及したことが要因です。砥石も個人で所有しています。

端部の錆に注目しました。田中徹氏は柔らかい石であり、鉄がなくともサヌカイトで剥抜加工できると説明されましたが、榊山古墳からは膨大な鉄くずが出土したと伝えられています。（倉敷考古館 HP）

## 8 『古事記』の第七代孝霊天皇と大吉備諸進命

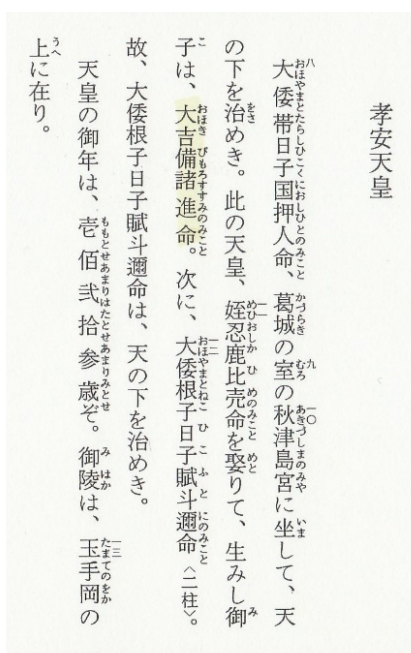


図 18 第六代孝安天皇皇子

第七代孝霊天皇は第六代孝安天皇の皇子で、兄の名前が大吉備諸進命です。『古事記』にのみ記録され、『日本書紀』には無視されています。吉備の初見名ですが岡山県では知られておりません。

『古事記』の書写過程で「兄の業績」が消されました。兄の記録を第5代孝昭天皇皇子の天押帯日子命と比較しました。『古事記』に同様の記録があったが、消されたと考えました。

第七代孝霊天皇は、黒田廬戸宮（奈良県磯城郡田原本町黒田周辺）に都を移します。山裾にあった宮から大和盆地中央への移転です。陵は片丘馬坂陵。宮内庁により奈良県北葛城郡王寺町本町3丁目の丘陵に治定され、皇居では、宮中三殿の1つの皇霊殿において他の歴代天皇・皇族とともに孝霊天皇の霊が祀られています。

### 8.1 第七代孝霊天皇と欠史八代説

戦後の歴史学では、『日本書紀』、『古事記』とも系譜の記載のみとして欠史八代の1人に数えられ、欠史八代とは第2代綏靖天皇から第9代開化天皇までの8代の天皇を指し、初期の天皇系譜は後世の創作説です。『旧辞』の部分、即ち物語や歌謡など具体的な歴史情報が存在しない、治世の長さが不自然であること等によります。歴史学には後世に記録が削除されたという発想がありません。

### 8.2 末子相続から古代天皇の渡来元の推定

平成27年11月8日に『第2回高校生による岡山の歴史・文化研究フォーラム』が開催され、岡山学芸館清秀高等部の「地域史探求ゼミ」の中中奈海・橘瑞貴さんが『神武天皇と西大寺のつながり』を発表しました。安仁神社祭神の研究発表です。指導は萩原良充先生です。参考文献が斉穎賢氏の『モンゴル社会における小家族と末子相続』でした。「弥生時代の戦いの思考」として「神武天皇は4人兄弟の末子であり、末子相続は遊牧民族の文化

であることがわかった。天皇家のルーツはモンゴルに起源を持つのではないかと考えた。」との注目すべき発表でした。

黄蕨の語源調査結果は東突厥国を意味しています。東突厥国から吉備国への渡来です。これは日本人バイカル湖畔起源説であり、古代から吉備国への渡来ルートがありました。アルタイ語民族のほとんど全てに見られる文化的要素が扶余、高句麗を通じ、さらに百済、新羅など朝鮮半島を経由して、古代日本の形成期に吉備国に伝わりました。しかし、岡山県の古代史研究は朝鮮半島までのようです。

## 9 吉備王の弟・鴨別へのこだわり

「大王のひつぎ実験航海事業」の航海日誌に、「早くから吉備王と火の国勢力が同盟していたことがわかる。昨日沿岸を通った笠岡、鴨方は、日本書紀によると九州・熊襲征討に派遣された吉備王の弟・鴨別が支配した地でもある。」と、吉備王の弟・鴨別に注目しています。しかし岡山県の加茂(鴨)地名は、岡山市北区加茂、津山市加茂町、赤磐市鴨前、浅口郡鴨方町、御津郡加茂川町があり、造山古墳近くの岡山市北区加茂の地名は『和名抄』では「都宇郡河面郷に属していたので河面が加茂に転じてできた村名」説です。

二つの鴨神社(加賀郡吉備中央町上加茂・浅口市鴨方町鴨方)祭神に鴨別命を確認しました。大和の鴨一族の発祥の地、高鴨神社(奈良県御所市鴨神)は全国鴨(加茂)社の総本宮です。主祭神 阿遲志貴高日子根命(迦毛之大御神) 事代主命 阿治須岐速雄命 下照姫命・天稚彦命であり鴨別命はありません。高鴨神社の説明は、「カモ」は「カミ」と同源であり「カモす」から派生し、気が放出している様子と説明しています。

### 9.1 吉備鴨別と熊襲国征討

吉備鴨別は『日本書紀』では笠臣祖で御友別の弟、『日本三代実録』元慶3年(879年)10月22日条では、吉備武彦命の第三男で笠朝臣の祖、『新撰姓氏録』右京皇別笠臣条では、稚武彦命の孫と表記され、はっきりしない人物です。

九州との関係は『日本書紀』神功皇后撰政前紀での熊襲国征討のみです。九州では熊襲国征討が最初の吉備国との関係で、隼人の記録が大隅国造、薩摩国造にありますが、岡山県民は知りません。鴨別へのこだわりは「熊本県の国造は阿蘇国と葦分国があり、葦分国造で吉備国に直結するのに、なぜ阿蘇国にこだわるのですか。」の質問です。

### 9.2 笠岡市の地名の由来

鴨別に関して、「応神天皇がかさめ山で狩りをされたとき、鴨別命がお共をして・・・かさの名を賜った。」とする弘仁6年(815年)の『新撰姓氏録』説を明治9年の「村誌」に紹介しています。記紀地名説は岡山県では笠岡市のみです。『先代旧事本紀』国造本紀に、「笠臣の国造 軽嶋豊明朝(応神天皇)の御世に、元からの領主の鴨別の命の八世の孫の笠三枝臣を国造に定められた。」とあり、古代豪族の世数、1世20年説では鴨別の命は応神天皇の160年前となり、30年説では240年前となり、応神天皇在位には多くの説があります。平成16年(2004年)の『笠岡市史』地名編は地形立地説です。

## 10 四道将軍・吉備津彦と「備中吉備津宮勸進帳」

『古事記』では、孝靈天皇の代に、大吉備津日子命と若建吉備津日子命を吉備へ派遣し、『日本書紀』では崇神天皇の代に、西海へ吉備津彦を派遣しましたが、歴史学では史実を疑問視しています。倭王権の勢威拡張を物語る将軍派遣説話です。

四道将軍として派遣された吉備津彦は、大吉備諸進命の血縁者ではありません。最もわかり易い説明が昭和28年(1953年)に金山寺の古文書を調査していた藤井駿氏(岡山大学教授)が発見した天正11年(1583年)の吉備津神社の『備中吉備津宮勸進帳』です。

### 10.1 「備中吉備津宮勸進帳」と名前の交換

天正11年(1583年)の『備中吉備津宮勸進帳』では一宮彦命の派遣です。異国の国王は、鬼神に命じて日本國の西半分を支配した。天皇家も滅亡の危機にひんした。そこで中央政府軍を派遣したが兵士の多くは戦死した。このため一宮彦命を吉備国に派遣しました。降参した「吉備冠者」が自分の名前を、大和から吉備平定に来た一宮彦命に譲って、一宮彦命が一宮吉備津彦大明神に改名しました。これにより吉備津彦命と呼ばれるようになり、元禄13年(1700年)の吉備津神社史料『備中吉備津宮縁起』で一宮彦命を伊弉池利彦命と改名しました。

## 11 まとめ

御真津日子訶惠志泥命、坐葛城掖上宮、治天下也。此天皇、娶尾張連之祖、奥津余曾之妹、名余曾多本毘売命、生御子、天押带日子命。次、大倭带日子国押人命。二故、弟带日子国忍人命者、治天下也。兄天押带日子命者、春日臣・大宅臣・粟田臣・小野臣・柿本臣・杵比賣臣・大坂臣・阿那臣・多紀臣・羽粟臣・知多臣・牟耶臣・都怒山臣・伊勢飯高君・老師君・近淡海国造之祖也。

天皇御年、玖拾参歳。御陵、在掖上博多山上也。

大倭带日子国押人命、坐葛城室之秋津島宮、治天下也。此天皇、娶姪忍鹿比売命、生御子、大吉備諸進命。次、大倭根日子子賦斗邇命。二柱。自賦下三字以音。故、大倭根日子子賦斗邇命者、治天下也。

天皇御年、壹佰式拾参歳。御陵、在玉手岡上也。

岡山県の古代史で、第七代孝靈天皇の兄、大吉備諸進命に注目したのは出宮徳尚氏(岡山市教育委員会)のみです。出宮徳尚氏は平成4年12月19日の岡山市中央図書館での講演『吉備津彦と造山古墳』の冒頭に、「4世紀、5世紀には天皇という制度的な位がまだありませんので大王と呼びますが、その大王は吉備からやはり出ているというのが今日の結論で、その大王陵が造山古墳であるということです。」と断言されました。

兄の記録を、第5代孝昭天皇皇子の天押带日子命と比較しました。『古事記』に同様の記録があったのが、削除されたと考えました。『先代旧事本紀』は物部氏、尾張氏の歴史記録です。私たちが学校で習った日本史では、記録が消されました。

図19 5代孝昭天皇皇子の天押带日子命

藤原氏にとって削除しなければならなかった名前が第七代孝靈天皇の兄、大吉備諸進命なのです。吉備津彦命の本当の父親の名前です。戦後の欠史八代説により存在を否定され

た第七代孝靈天皇。しかし岡山県の古代史は第七代孝靈天皇の御子「吉備津彦命」に始まります。

### 11.1 造山古墳埋葬者と千足古墳埋葬者の推定

造山古墳埋葬者を大吉備諸進命、千足古墳の埋葬者を三井根子命と推定しました。三井根子命の国造記録は第12代景行天皇の時代です。『日本書紀』には第10代崇神天皇の即位年が「甲申（こうしん）年」とあり、「甲申年」を264年と解読された水野正好氏（奈良大学名誉教授）は、「女王台与の死に二年先立つこととなりますから、女王台与の摂政の位置に崇神がついたことを示す。」と説明され、西川寿勝氏（大阪府教育委員会）は「崇神天皇は卑弥呼の男弟」説です。吉備津彦命の御子で阿蘇と吉備国が直結しましたが、『日本書紀』では崇神天皇が四道將軍を派遣しています。『地名学では邪馬台国は岡山です』説から抜粋。

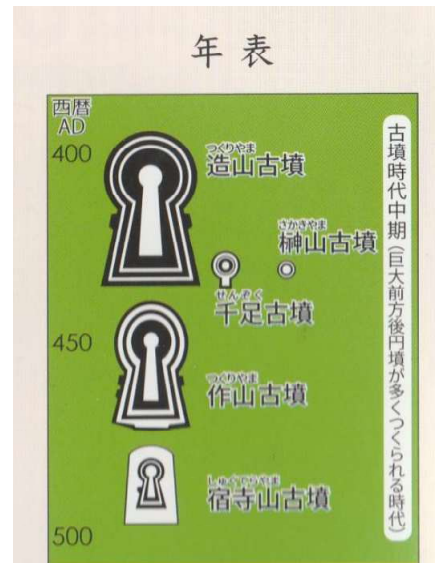


図 20 吉備路の歴史遺産

天皇世代系譜と吉備の群像			
先代旧事本記	『古事記』	『日本書紀』	天皇世代と西暦換算
	大吉備諸進命		孝靈の兄 孝靈（第7代天皇）
	大吉備津日子命 若日子建吉備津日子命	吉備津彦命 稚武彦命	孝元（第8代天皇）
	比古伊佐勢理毘古命 大吉備津日子命	彦五十狭芹彦命 吉備津彦命	第7代孝靈天皇の皇子 四道將軍の1人
		吉備武彦	崇神（10代天皇）が 四道將軍を派遣 264年～4世紀前半
	若建吉備津日子		垂仁（11代天皇）
三井根子命	三人	吉備武彦	景行（12代天皇） 4世紀前期から中期の大王

図 21 吉備津彦命と吉備津彦 出宮徳尚氏作成に丸谷追記

岡将男氏（全国邪馬台国連絡協議会中四国支部長）から「西暦年号との関係の考察がずさんすぎる。」と原案から指摘されています。神武天皇元年を皇紀元年とし縄文時代のBC 660年とする上古天皇の西暦対照表が公開されていますが、神武天皇の時代には元号は使用されていません。孝靈天皇元年は皇紀371年、西暦BC 290年とされています。皇紀とは日本の紀元を日本書紀の神武天皇即位年（紀元前660年）を元年と起算し、明治5年（1872年）に布告しました。『魏志倭人伝』によれば「日本には3世紀当時においてさえ暦法が

無く、いわゆる自然暦を用いていたことが推察される」と大谷光男氏（二松学舎大学教授）は報告し、『日本書紀』欽名天皇 14 年（553 年）六月の条が暦博士・易博士の初見です。

岡将男氏の「西暦年号との関係の考察がずさんすぎる。」との指摘に対して、私達が記憶しているのは祖父・祖母・孫・ひ孫迄です。自分が記憶していないのに五世、六世、八世という記録を正しいとする歴史学者に疑問を感じます。欠史八代説を西暦推定しました。記録が正確では無く丸谷説の可能性ありと考えます。

### 5つのポイント!

### 造山古墳に眠る王者は誰か？

- ① 造山古墳は、吉備の王墓です。大和の大王墓（履中天皇陵古墳）とほぼ同じ大きさです。
- ② 造山古墳や周囲の古墳へは、九州の天草や阿蘇（熊本県）などの各地から、石棺、石障、石室石材が運ばれてきています。それらを運ばせる強い影響力があったことを示しています。
- ③ 古事記、日本書紀などの古い文献によると九州、四国、東海、北陸には、吉備の系譜を引く有力豪族がいたようです。大和の大王と同様に、自分の身内やまわりの豪族を派遣する権利を持っていたと考えられます。
- ④ 吉備には、大王の皇子（吉備津彦命）と互角の力を持った温羅がいた伝説があります。これが桃太郎伝説につながったといえます。
- ⑤ しかし、造山古墳の時代には、大和と吉備が戦った証拠はありません。お互いに融和し、協力していたに違いありません。

以上のことから、造山古墳には大和の大王に匹敵する勢力があり、各地に豪族を派遣できる政治力を持った吉備の王が葬られていると考えることができます。大和の大王にとって、吉備の王は、倭国をまとめるうえで、必要不可欠な存在であったのです

ズバリ解説 造山古墳に眠る王者の正体 岡山市説

## 11.2 吉備津彦命と吉備津彦『日本書紀』

図 21 は出宮徳尚氏の『吉備津彦伝承考(弐) その系譜の史料的検証』p6 からです。

2009 年の『吉備地方文化研究第 19 号』就実大学吉備地方文化研究所寄稿です。

おそらく、『日本書紀』崇神天皇の吉備津彦に命が欠落していることに気がついたのは出宮徳尚氏のみだと思います。私も校正ミスとして吉備津彦命と読んでいました。

「二 吉備の群像の史料再検討」に、「崇神紀の吉備津彦は、孝靈紀の吉備津彦命と同一人物視されているが、崇神紀では彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと）に命(尊称)付けにしているのに対して吉備津彦には命付けがなく、両者を別人扱いにしていると



解釈できる。・・・吉備津彦命と吉備津彦は親子関係の別々の人物と解釈するのが妥当である。」と。しかし、吉備津彦とは崇神天皇が派遣した四道将軍の名前なのです。

『10 四道将軍・吉備津彦と「備中吉備津宮勸進帳」』に戻ってお読みください。

### 11.3 造山古墳石棺に、何故、阿蘇石を使用するのか

何故、九州阿蘇山の阿蘇溶結凝灰岩（馬門石）の石棺を熊本県宇土市から吉備へ運ぶのか。運搬理由は、数トンに及ぶ阿蘇石を運搬する様子を見せることによる権力交代の誇示です。見せる石棺は現代の見せる国葬儀に通じます。全ての阿蘇石石棺は大吉備諸進命の末裔、物部氏、尾張氏と推定します。

## 12 追記 『焚火による縄文ベンガラ製造実験に成功』

令和4年10月31日に「焚火による縄文ベンガラ製造実験」を行いました。赤泥（ソブ）を使用した縄文時代のベンガラ製造方法です。縄文ベンガラ製造実験は大成功でした。追い焚きにより約900℃の高温実験であったことを11月2日に確認しました。

### 12.1 焚火温度と製鉄温度

生本和浩氏は「焚火温度は縄文時代は800℃、弥生時代は900℃～950℃との文献記録は実験測定温度ではない」と指摘されます。追い焚きにより約900℃の高温実験実施を11月2日に確認しました。炎の温度と土器表面温度には温度差があります。



図 22 焚火実験

### 12.2 赤泥（ソブ）からの縄文ベンガラ製造実験

#### 12.2.1 縄文ベンガラの原料採取 大苧田池（かんだ・赤磐市赤坂町）

大苧田池周辺に赤泥（ソブ）があります。この赤泥（ソブ）を実験に使用しました。



図 23 大苧田池の赤泥

#### 12.2.2 磁石反応によりベンガラ製造確認 「約600℃のベンガラ色」

磁石反応によりベンガラ製造を確認しました。約 600°Cのベンガラです。春日井たたら研究会ガスコンロ使用のベンガラ色との違いに注目です。焚火開始後 1 時間の採取です。



図 24 ガスコンロ使用色



図 25 約 600°Cのベンガラ色

### 12.3 追い焚きによる「約 900°Cのベンガラ色」 (11月2日確認)



図 26 約 900°Cのベンガラ色

生本和浩氏は追い焚きによる空き缶の変形から、約 900°Cの高温実験と説明されます。白石齊氏（陶芸家）の教示「ベンガラは温度により変色」実験は成功しました。

### 12.4 吉備高原の赤鉄鉱



図 27 赤色土壌

吉備高原面表層岩石は、6m以上の深さまで赤色土壌化しています。（まつだ牧場）白亜紀の花崗岩が赤色土壌化しています。土壌化を免れた花崗岩試料と赤色土壌試料の化学分析をした結果、鉄 (Fe) とアルミニウム (Al) が濃集し、アルカリ元素 (Na) やアルカリ土類元素 (Ca) が異常に減少しています。赤色は酸化鉄（赤鉄鉱）とアルミニウム水酸化物によると判断しています。

地球史研究所 板谷徹丸先生

## 12.5 岡山大学での成分分析



図 28 岡山大学での成分分析

令和5年2月2日に岡山大学での分析に立会いました。弥生時代の製鉄原料を赤泥(ソブ)と考え、焚火実験で製造したベンガラと備前焼の登窯で製造した海綿鉄の分析です。

分析者 中野知佑氏 (資源学)  
サイテック・コーディネーター

## 13 謝辞

令和4年7月24日に、造山古墳<sup>つくりやまこふん</sup>を訪問し、定廣好和氏<sup>つくりやまこふん</sup> (造山古墳蘇生会会長) に挨拶し、著書『吉備のまほろば 造山古墳陪塚<sup>つくりやまこふんばいちゆう</sup>』をいただき、令和4年9月10日に原案完成し造山古墳蘇生会ガイドの田中徹氏<sup>うとし</sup>に案内していただきました。

令和4年9月13日に高木恭二氏<sup>あしきた</sup> (元宇土市教育委員会) より電話で教示いただきました。私の宇土市教育委員会文化課への質問は、「高木恭二先生は、なぜ難しく考えるのですか。熊本県の国造は阿蘇国と葦分国<sup>あしきた</sup>があり、葦分国造<sup>あしきた</sup>で吉備国に直結するのに、なぜ阿蘇国造にこだわるのですか。」です。令和4年9月25日に中間報告を定廣好和氏に提出しました。

令和4年9月29日に大井透氏より平成17年(2005年)の「大王のひつぎ航海実験」の詳細なメモをいただき、「阿蘇石石棺<sup>おほき びもろすすみのみこと</sup>は大吉備諸進命と同族の物部氏、尾張氏のみで使用された。」説が纏まりました。令和4年10月1日に「笠岡市の地名の由来」について安東康宏氏<sup>あしきた</sup> (笠岡市教育委員会) からメールをいただきました。

三井根子に最初に注目されたのは出宮徳尚氏の『吉備津彦伝承考(弐) その系譜の史料学的検証』です。「五 国造本紀の吉備津彦関連記事の検討」です。古代吉備国を語る会でお会いし「三井根子について論考中」と報告したところ、抜刷をいただきました。詳細な論考です。

造山古墳<sup>つくりやまこふん</sup>研究による町興しは、平成19年の定廣好和氏の造山町町内会長就任に始まりました。定廣好和氏の学会、政界等、各方面への人脈です。吉備国の在野研究者としての応援が今回の論文です。埋葬者の推定は誰でも参加できます。参加しましょう。

## 14 主なる参考文献

- 『吉備のまほろば 造山古墳陪塚<sup>つくりやまこふんばいちゆう</sup>』造山古墳蘇生会 2020年11月
- 『先代旧事本紀 現代語訳』安本美典 志村裕子 批評者 2013年 p550
- 『陵墓 - 宮内庁』 (kunaicho.go.jp) 令和4年9月10日
- 『新訂増補 国史大系第七巻 先代旧事本紀<sup>せんたいいくじほんぎ</sup>』吉川弘文館 昭和41年 p154~p156
- 『奇書 先代旧事本紀の謎をさぐる』安本美典 批評社 2007年 p210
- 『謎の根元聖典 先代旧事本紀大成経<sup>せんたいいくじほんぎたいせいきやう</sup>』後藤隆 2004年 徳間書店

『小山古墳（赤磐市）』古墳マップ（kofun.info）令和4年9月10日

『大王のひつぎ実験航海事業』 | 宇土市公式ウェブ（uto.lg.jp）令和4年9月10日

『古墳時代の石棺の推移 - 歴史探訪塾』（ango2020.com）令和4年9月10日

『考古資料集成9.石棺』兵庫県立考古博物館（hyogo-koukohaku.jp）令和4年9月10日

『運ばれた巨石に関する一考察』中根洋治ほか 土木学会第63回学術講演会2008年  
<http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00035/2008/63-04/63-04-0190.pdf>

『阿蘇ピンク石の石棺 - わかりやすく解説』Weblio 辞書令和4年9月10日

『石棺とは』 - コトバンク（kotobank.jp）令和4年9月10日

『阿蘇熔結凝灰岩製石棺と倭王権』（oct-net.ne.jp）令和4年9月10日

「千足古墳と初期横穴式石室」西田和浩 平成28年度岡山市埋文講座2017年1月21日

『論文 直弧文を有する古墳の始まりと、その後の展開』高木恭二 西平孝史 2019年

『直弧文がある古墳の紹介』西平孝史 直弧文アート研究所 裏表紙、p6～p7

『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第68集 1984年

「吉備地方における国造制の成立」吉田晶『史学研究5』第384号 青木書店 1972年 p1～p20

『先代旧事本紀大成経（四）続神道体系 論説編』小笠原春夫 平成11年 神道体系編纂会 p364～p385

『新道体系 古典編八 先代旧事本紀』昭和55年 新道体系編纂会 p223～p224

『青銅製馬形帯鉤』天理大学参考館セレクション（sankokan.jp）令和4年9月10日

『洞第2古墳群』岐阜県公式（文化財保護センター）（gifu.lg.jp）令和4年9月10日

「孝安天皇」『古事記』岩波書店 昭和33年 p171

『吉備津神社と吉備津彦神社の温羅伝説の違いをご存じですか』丸谷憲二 令和4年6月

『笠岡市史 地名編』平成16年 笠岡市 p73～p75

『増訂 小田郡誌』昭和16年 小田郡教育会 p12t～p13

「吉備津彦と造山古墳」出宮徳尚 『文化の広場』2 岡山市スポーツ文化振興財団 p63～

「吉備津彦伝承と造山古墳」出宮徳尚『吉備されど吉備』古代吉備国を語る会 2000年 p175p～p186

『吉備津彦伝承考(弐) その系譜の史的検証』出宮徳尚 『吉備地方文化研究第19号』  
2009年 就実大学吉備地方文化研究所 p6

『吉備（黄蕨）国・高嶋宮伝承の解析』丸谷憲二 平成20年10月28日

『神武天皇の東征 吉備高嶋伝承考 岡山』丸谷憲二 令和1年10月26日

『神武天皇の東征 吉備高嶋伝承考 笠岡』丸谷憲二 令和1年11月19日

『古代の暦日』大谷光男 昭和51年 雄山閣出版

『日本暦日原典』内田正男（日本の暦学者）1975年 雄山閣出版

『造山古墳群伝承物語』2022年 国際美術研究所 造山古墳蘇生会

『「黄蕨之前州高島山松林寺略縁起」と吉備国語源考 黄蕨・羈縻政策説と日本人バイカル湖畔起源説』丸谷憲二 令和5年3月18日